

2025年度
江崎玲於奈賞・つくば賞・つくば奨励賞
授賞式・受賞記念講演会

2026年2月13日(金)
つくば国際会議場

2025
Leo Esaki Prize
Tsukuba Prize
Tsukuba Encouragement Prize
Prize-giving Ceremony
Lectures by Winners

February 13, 2026
Tsukuba International Congress Center
(EPOCHAL TSUKUBA)

The Science and Technology Promotion Foundation of Ibaraki
Science Academy of Tsukuba

一般財団法人 茨城県科学技術振興財団
つくばサイエンス・アカデミー

—— 江崎玲於奈賞、つくば賞・つくば奨励賞について ——

【江崎玲於奈賞】

日本国内の研究機関において、ナノサイエンスおよびナノテクノロジー、または量子効果が顕わに関わる物性に関する研究に携わり、世界的に評価を受ける顕著な研究業績を挙げた研究者を表彰することにより、科学技術の振興と産業の活性化に寄与することを目的として、関彰商事株式会社の協賛を得て平成16年（2004年）に創設された賞である。

主催：一般財団法人 茨城県科学技術振興財団、つくばサイエンス・アカデミー
共催：茨城県
協賛：関彰商事株式会社
後援：文部科学省、**NHK**
協力：つくば国際会議場

【Leo Esaki Prize】

This Prize was established in 2004 by support of SEKISHO CORPORATION, to contribute to the advancement of science and technology and the vitalization of industry by honoring a researcher working in Japan who has received international acclaim for remarkable results in the field of NANO Science&Technology.

Organized by : The Science and Technology Promotion Foundation of Ibaraki
Science Academy of Tsukuba
Co-organized by : Ibaraki Prefectural Government
Sponsored by : SEKISHO CORPORATION
Supported by : Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology
NHK
Cooperated by : Tsukuba International Congress Center

【つくば賞・つくば奨励賞】

○つくば賞

茨城県内において、科学技術に関する研究に携わり、世界的に評価を受ける顕著な研究成果を収めた者を表彰することにより、科学技術の振興に寄与することを目的として、平成元年（1989年）に創設された賞である。

○つくば奨励賞

茨城県内において、科学技術に関する研究に携わり、その研究結果が実用化される等の成果を収めた者、若しくは若手研究者であって、今後飛躍的な研究成果が期待できる者を顕彰することにより、科学技術の振興に寄与することを目的として、平成2年（1990年）に創設された賞である。

主催：一般財団法人 茨城県科学技術振興財団、つくばサイエンス・アカデミー
共催：茨城県、つくば市
協力：つくば国際会議場

○Tsukuba Prize

This Prize was established in 1989 to contribute to the advancement of science and technology by honoring a researcher working in Ibaraki Prefecture who has received international acclaim for remarkable results in the field of science technology.

○Tsukuba Encouragement Prize

This Prize was established in 1990 to contribute to the advancement of science and technology by honoring a researcher Working in Ibaraki Prefecture whose results have been put to practical use or otherwise to a young researcher who has great potential for rapid progress in field of science and technology.

Organized by : The Science and Technology Promotion Foundation of Ibaraki
Science Academy of Tsukuba
Co-organized by : Ibaraki Prefectural Government
Tsukuba City
Cooperated by : Tsukuba International Congress Center

ごあいさつ

一般財団法人 茨城県科学技術振興財団 理事長

つくばサイエンス・アカデミー 会長

江崎 玲於奈



茨城県には、つくば・東海における最先端の科学・技術の研究機関や、日立・鹿島地域の優れた産業拠点などが集積し、我が国の科学・技術の発展に大きく貢献しています。

そもそも、科学は自然界のルールを解明する体系的な知識であり、それを社会や企業の利益、医療の向上のために活用するノウハウが技術です。この科学と技術こそが、われわれの高度な生活水準の基盤になっており、それらを発展させる原動力がつくばの研究機関などで行われている科学の研究であり技術の開発なのです。

サイエンスの研究において得られる新しい知識は論理的整合性をもって、それまでのものの上に次々と加わり続けるので、サイエンスには「進歩」が内蔵されていることとなります。これが科学文明の強い基盤です。芸術、音楽、文学などの文化においては「変貌」を遂げますが、必ずしも「進歩」はしません。

江崎玲於奈賞、つくば賞、つくば奨励賞は、茨城県科学技術振興財団とつくばサイエンス・アカデミーが主催し、素晴らしい業績を挙げられた研究者を表彰するものであります。

「江崎玲於奈賞」は、国内においてナノサイエンスおよびナノテクノロジーまたは量子効果が顕わに関わる物性分野の研究に携わり、世界的に評価を受ける卓越した研究業績を挙げた研究者を表彰するもので、2004年に創設され、当初より関彰商事株式会社のご支援をいただきながら、今回で22回目を迎えました。

また、「つくば賞」は、茨城県内において、科学・技術に関する研究に携わり、極めて顕著な研究成果を収めた研究者を表彰するもので、1989年に創設され今回で36回目を迎えました。

さらに、「つくば奨励賞」は、茨城県内において、科学・技術に関する研究に携わり、その研究結果が実用化される等の成果を収めた研究者、若しくは若手研究者であって、今後飛躍的な研究成果が期待できる者を表彰するもので、1990年に創設され今回で35回目を迎えました。

今回も大学・研究機関・学会・民間企業等から優れた多くの研究者をご推薦いただきました。審査委員の皆様をはじめ関係者の皆様のご尽力により、素晴らしい業績を挙げた4名の方々を受賞者として選出できたことを大変嬉しく思います。

去る10月28日にオンラインにて開催した江崎玲於奈賞委員会及びつくば賞委員会において各賞の受賞者が決定され、引き続き受賞者発表を行いました。記者発表には、審査委員であるノーベル賞受賞者の白川英樹博士、野依良治博士、小林誠博士、協賛企業である関彰商事株式会社代表取締役社長の関正樹氏が同席する中、多数のマスメディアの取材を受け、県内はもとより全国に受賞者及び受賞の対象となった研究について発信することができました。

昨年10月には、2013年の江崎玲於奈賞受賞者である京都大学の北川進特別教授がノーベル化学賞を受賞され、歴代受賞者の中から初めてノーベル賞受賞者が誕生しました。これまでに受賞された方々についても、それぞれの分野においてより一層活躍されており、これらの賞が高い評価を得ているものと思っております。私どもといたしましては、江崎玲於奈賞、つくば賞そしてつくば奨励賞を、茨城県はもとより、我が国の、そして世界の科学・技術の発展に寄与する権威ある賞として育んでいきたいと考えております。

最後になりますが、当財団及びつくばサイエンス・アカデミーといたしましては、今後も科学・技術の振興に努力してまいりますので、皆様方におかれましても、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます、挨拶といたします。

Ibaraki Prefecture is leading the country in science and technology with the most cutting-edge research institutes including Tsukuba and Tokai, and the outstanding industrial centered in Hitachi and Kashima regions. This allows significant contribution to the science and technology development in Japan.

To begin with, science is the systematic acquisition of knowledge that allows the understanding of nature and utilises the “know-how” to benefit the society, and the technological improvement for industries and medical care.

Science and technology have provided the basis for our high standard of living. It is also the driving force for the scientific research and technological development conducted at research institutes in Tsukuba.

Science accumulates knowledge with a logical self-consistency that facilitates progress and provides a strong foundation of modern civilization. The fields of art, music, and literature undergo "transformation," but not necessarily “progress”.

The Leo Esaki Prize, Tsukuba Prize, and Tsukuba Encouragement Prize are sponsored by The Science and Technology Promotion Foundation of Ibaraki and the Science Academy of Tsukuba, and honor researchers who have made significant achievements.

Established in 2004 with the support of SEKISHO CORPORATION, and marking its 22nd anniversary this year, the Leo Esaki Prize honors researchers engaged in research field of nanoscience and nanotechnology, physical properties related to the manifestation of quantum effects in Japan, whose have received internationally recognition.

The Tsukuba Prize was established in 1989 and celebrated its 36th anniversary this year. This award honors researchers in Ibaraki Prefecture have made outstanding achievement in scientific and technological research field.

Moreover, established in 1990 and marking its 35th anniversary this year, the Tsukuba Encouragement Prize honors researchers engaged in research related to science and technology in Ibaraki Prefecture whose results have been put to practical use or otherwise utilized, and for young researchers who have potential for producing significant results in their fields in the future.

Many excellent researchers from universities, research institutions, scientific societies, private enterprises, etc. were recommended for the this years' prizes.

Thanks to valiant efforts of the judging committee, organization, and all the staff related to the prizes, four researchers have been selected for their outstanding achievements and I am pleased with that.

On October 28th, the winners of each prize were selected by the Leo Esaki Prize online committee and the Tsukuba Prize online committee, after which a press announcement release was held to announce the winners. Attendees at the press announcement release included Nobel Prize laureates Dr. Hideki Shirakawa, Dr. Ryoji Noyori, Dr. Makoto Kobayashi, served on the judging committee, who as well as Mr. Masaki Seki, President of SEKISHO CORPORATION, our supporting organization. With their kind participation, we received extensive media coverage, which served to publicize each awardee and their research, not only within the prefecture, but throughout the country.

Last October, Distinguished Professor Kyoto University Susumu Kitagawa, winner of the 2013 Leo Esaki Prize, was awarded the Nobel Prize in Chemistry, became the first former recipient to win a Nobel Prize. The past recipients of these prizes continue to do even more excellent work in their respective fields of research, and I believe that our Prizes are gaining widespread acclaim. It is our intention to continue developing the Leo Esaki Prize, Tsukuba Prize, and Tsukuba Encouragement Prize as influential awards that will contribute to the development of science and technology not only in Ibaraki Prefecture, but in our country as well as the world.

Finally, the Foundation and Tsukuba Science Academy will continue to strive to promote science and technology, and we would like to ask all of you for your continued support and cooperation.

Leo Esaki

Chairman, The Science and Technology Promotion Foundation of Ibaraki
President, Science Academy of Tsukuba

次 第

第1部 授賞式 (13:30～) (Leo Esaki メインホール)

- 1 開 式
- 2 あいさつ
- 3 江崎玲於奈賞授賞式
 - 賞状等授与
- 4 つくば賞・つくば奨励賞授賞式
 - 賞状等授与
 - ・ つくば賞
 - ・ つくば奨励賞 (実用化研究部門)
 - ・ つくば奨励賞 (若手研究者部門)
- 5 祝 辞

第2部 受賞記念講演会 (14:45～) (Leo Esaki メインホール)

- 1 講 演
 - 江崎玲於奈賞
九州大学大学院工学研究院応用化学部門 主幹教授
(最先端有機光エレクトロニクス研究センター センター長) 安 達 千波矢 氏
「有機二重ヘテロ構造の構築と新しい発光分子の創製による有機LEDの
高性能化」
 - つくば賞
物質・材料研究機構 フェロワー 高 田 和 典 氏
「全固体電池の研究開発」
 - つくば奨励賞 (実用化研究部門)
物質・材料研究機構 構造材料研究センター
超耐熱材料グループ 主任研究員 Wu Rudder 氏
「持続可能な未来を支える革新的なマテリアル・イノベーション：TIISA
断熱材技術の展開と社会実装」
 - つくば奨励賞 (若手研究者部門)
筑波大学 システム情報系
准教授／高等研究院 (TIAR)／自発研究ユニット フェロワー 海老原 格 氏
「水中における通信と測位を実現する音響無線技術に関する研究」
- 2 閉 会

「Leo Esakiメインホール」の命名について

「Leo Esakiメインホール」は、社会貢献活動の一環として茨城県の「ネーミングライツパートナー」制度に賛同された関彰商事株式会社様に命名いただきました。

同ホールが「つくば国際会議場 大ホール」としてG7茨城・つくば科学技術大臣会合など国際会議の実績を重ねている点を踏まえ、茨城県およびつくば市が世界に誇る科学技術力を広く発信していけるネーミングを検討されたとのことです。そこには、ノーベル物理学賞受賞者で、一般財団法人茨城県科学技術振興財団の理事長として長年に亘り茨城県の科学技術振興に尽力している江崎玲於奈理事長の名を冠することが最もふさわしいとの想いが込められています。

2025年度 江崎玲於奈賞

2025 Leo Esaki Prize



江崎玲於奈賞 表彰盾（江崎玲於奈氏肖像）

2005年 江崎眞佐子氏（江崎玲於奈氏令夫人・日展日本画部会友）作

Leo Esaki Prize Commendation shield (Dr. Leo Esaki's portrait)

Designed by Mrs. Masako Esaki in 2005

江崎玲於奈賞委員会委員 (敬称略・順不同・審査時点)

委員長 江崎 玲於奈 一般財団法人 茨城県科学技術振興財団 理事長
つくばサイエンス・アカデミー 会長
(1973年ノーベル物理学賞受賞)

委員 白川 英樹
国立大学法人 筑波大学 名誉教授
(2000年ノーベル化学賞受賞)



委員 野依 良治
日本学士院 院長
(2001年ノーベル化学賞受賞)



委員 小林 誠
大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構 特別荣誉教授
(2008年ノーベル物理学賞受賞)



委員 天野 浩
国立大学法人東海国立大学機構 名古屋大学 未来材料・システム研究所 教授
(2014年ノーベル物理学賞受賞)



委員 毛利 衛
日本科学未来館 名誉館長
宇宙飛行士



委員 岡田 雅年 国立研究開発法人 物質・材料研究機構 名誉顧問

委員 丸山 清明 つくばサイエンス・アカデミー 副会長

江崎玲於奈賞検討委員会 (敬称略・順不同・審査時点)

委員長 榊 裕之 奈良国立大学機構 理事長

委員 安藤 恒也 東京科学大学 荣誉教授

委員 荒川 泰彦 東京大学 ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 特任教授

委員 樽 茶清 悟 理化学研究所 量子機能システム研究グループ グループディレクター

委員 片岡 一則 川崎市産業振興財団 副理事長 ナノ医療イノベーションセンター センター長

委員 蔡 兆申 東京理科大学 理学部 教授

委員 相田 卓三 理化学研究所 創発物性科学研究センター 創発ソフトマター機能研究グループ グループディレクター

委員 平山 祥郎 量子科学技術研究開発機構 (QST) SIP推進センター長 東北大学 特任教授・総長特別補佐

委員 齋藤 理一郎 東北大学 名誉教授

委員 平川 一彦 東京大学 名誉教授

委員 磯貝 明 東京大学 特別教授

2025年度 江崎玲於奈賞

2025 Leo Esaki Prize

工学博士 安達 千波矢 氏 (1963年生)

九州大学大学院工学研究院応用化学部門・主幹教授

(最先端有機光エレクトロニクス研究センター・センター長)

Ph.D in Engineering, Chihaya Adachi

Distinguished Professor, Kyushu University, Faculty of Engineering, Department of Applied Chemistry

Director, Center for Organic Photonics and Electronics Research (OPERA)



受賞の対象となった研究主題および研究内容

研究主題 「有機二重ヘテロ構造の構築と新しい発光分子の創製による有機LEDの高性能化」

研究内容 安達氏は、有機LED (OLED) において発光層への励起子の閉じ込めと可能とする理想的なダブルヘテロ (DH) 構造を構築し、電子、ホール及び電気励起で生成した励起子の発光層への完全な閉じ込めを実現した。本成果は、現在の高効率・高耐久OLEDの基本構造となっており、実デバイスにおいてその概念が幅広く活用されている。一方で、電子的性質の異なる有機層界面には様々な分子間相互作用が存在することを明らかにし、有機層界面におけるエキサイプレックス (Exciplex) 形成や電荷移動 (CT) 相互作用の解明を進めることで、その後の熱活性化遅延蛍光 (TADF) 分子の発見に繋がった。

OLEDの発光分子は第一世代である蛍光材料から研究がスタートし、その後、第二世代である室温りん光分子へと開発が進展し、白金 (Pt) やイリジウム (Ir) 等を含有する有機金属錯体を発光層に用いた研究が進められてきた。しかしながら、これらの発光材料は、有機金属錯体構造に起因する分子設計の自由度の低さや貴金属が抱える高コストと希少資源の問題を本質的に抱えていた。そこで、安達氏は未開拓であったTADF現象に着目し、量子化学計算を用いた巧みな分子設計によって、三重項励起子を $\sim 100\%$ の効率で一重項励起子に変換する分子を創出し、OLEDにおいて100%の内部量子効率を、貴金属を含有しない芳香族化合物で実現した。現在、TADF分子は多彩な分子構造が開発され、OLEDにおける第三世代発光材料としての地位を確かなものとしている。

安達氏の研究は、過去30年において、OLEDを中心軸に有機デバイス工学の学理の発展と産業化に大きな寄与を果たしてきた。そして、OLEDにおいて100%の電流-光変換を可能としたばかりでなく、分子内スピン変換機構の理解の深化や有機デバイスにおいて固体薄膜における分子内及び分子間CT状態の精密制御が本質的にデバイス性能に重要な役割を果たしていることを体系的に学理として明らかにしてきた。これらの先駆的な研究と卓越した成果が評価され、安達氏を2025年の江崎玲於奈賞の受賞者に決定した。

Research Theme, Background and Achievements

Research Theme “High-performance Organic LED through the Construction of Organic Double Heterostructures and the Creation of Novel Luminescent Molecules”

Research Background and Achievements Prof. Adachi constructed an ideal double heterostructure (DH) for organic light-emitting diodes (OLEDs) that enables the complete confinement of electrons, holes, and electrically generated excitons within the emissive layer. This achievement laid the foundation for today's high-efficiency, long-lasting OLEDs, and its concept is widely used in practical devices. Simultaneously, he clarified that various intermolecular interactions exist at organic layer interfaces with differing electronic properties. By advancing understanding of exciplex formation and charge-transfer (CT) interactions at these interfaces, he paved the way for the subsequent discovery of thermally activated delayed fluorescence (TADF) molecules.

Research on OLED-emitting molecules began with fluorescent materials, which have been categorized as the first generation. Subsequently, development progressed to the second-generation room-temperature phosphorescent molecules, composed of organometallic complexes containing precious metals such as platinum (Pt) or iridium (Ir). However, these emitting materials inherently faced limitations: restricted molecular design freedom due to the organometallic complex structure, and the high cost and scarcity issues associated with precious metals. To overcome these issues, Prof. Adachi focused on the unexplored TADF phenomenon. Through skillful molecular design using quantum chemical calculations, he created molecules that convert triplet excitons to singlet excitons with ~100% efficiency. This achieved 100% internal quantum efficiency in OLEDs using aromatic compounds that do not contain precious metals. Today, diverse TADF molecular structures have been developed, solidifying their position as the third-generation light-emitting materials for OLEDs.

Over the past 30 years, Prof. Adachi's research has made significant contributions to the academic development and industrialization of organic device engineering, centered on OLEDs. Not only did he enable 100% current-to-light conversion in OLEDs, but he also systematically elucidated the fundamental principles: deepening the understanding of intramolecular spin-conversion mechanisms and demonstrating that precise control of intramolecular and intermolecular CT states in organic devices plays an essential role in device performance. In recognition of this pioneering research and outstanding achievements, Prof. Adachi has been selected as the recipient of the 2025 Leo Esaki Prize.

2025年度 つくば賞 2025年度 つくば奨励賞

2025 Tsukuba Prize
2025 Tsukuba Encouragement Prize



つくば賞・つくば奨励賞メダル

1989年 小森 邦夫氏（元日本芸術院会員）作

純銀製

Tsukuba Prize · Tsukuba Encouragement Prize Medal

Designed by Mr. Kunio Komori (Appointment to the Japan art academy) in 1989

Pure silver Made

つくば賞委員会委員 (敬称略・順不同・審査時点)

委員長	江崎 玲於奈	一般財団法人 茨城県科学技術振興財団 理事長 つくばサイエンス・アカデミー 会長
委員	飯島 澄男	名城大学 終身教授
委員	中村 道治	国立研究開発法人 科学技術振興機構 名誉理事長
委員	永田 恭介	国立大学法人 筑波大学 学長
委員	宮田 武雄	国立大学法人 茨城大学 名誉教授

つくば賞予備審査会委員 (敬称略・順不同・審査時点)

会長	板東 義雄	物質・材料研究機構 名誉フェロー・ウーロンゴン大学 名誉教授
委員	中津 欣也	株式会社日立製作所 研究開発グループ グリーンインフライノベーションセンタ 主管研究長
委員	濱川 聡	産業技術総合研究所 上級執行役員
委員	高本 英司	J S R 株式会社筑波事業所長
委員	日下 康成	積水化学工業株式会社 先進技術研究所 所長
委員	城石 俊彦	理化学研究所 バイオリソース研究センター センター長
委員	長山 和亮	茨城大学 大学院 理工学研究科 教授
委員	西田 智子	農業・食品産業技術総合研究機構 理事
委員	金保 安則	筑波大学 大学執行役員
委員	朝岡 秀人	日本原子力研究開発機構 先端基礎研究センター 副センター長
委員	宇津木 照洋	公益財団法人小林がん学術振興会 代表理事
委員	千葉 靖典	産業技術総合研究所 研究戦略部 次長・生命工学領域 副領域長
委員	大迫 政浩	国立環境研究所 企画部フェロー
委員	宮崎 修一	筑波大学 名誉教授
委員	山本 勝利	農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境研究部門 研究所長
委員	足立 伸一	高エネルギー加速器研究機構 理事

2025年度 つくば賞

2025 Tsukuba Prize

博士（工学） 高田 和典 氏（1961年生）

物質・材料研究機構 フェロロー

Dr. Kazunori Takada

Fellow, National Institute for Materials Science



受賞の対象となった研究主題および研究内容

研究主題 「全固体電池の研究開発」

研究内容 リチウムイオン電池の誕生はノートパソコンや携帯電話の普及を促し、高度情報化社会の構築をもたらしたのみならず、低炭素社会実現に向けた自動車の電動化や再生可能エネルギーの高効率貯蔵への道を切り開いた。しかしながら、可燃性の有機溶媒を用いるリチウムイオン電池において、このような用途での電池の大型化は安全性の低下を引き起こす。不燃性の固体電解質を採用する全固体電池はこの問題の抜本的な解決法として期待されていたが、全固体電池のエネルギー密度、出力密度はいずれもリチウムイオン電池に遠く及ばないものであった。

この状況を打破するために高田氏は、まずエネルギー密度の向上に取り組んだ。リチウムイオン電池と全固体電池の最大の違いは、もちろんのこと電解質が液体か固体かということであり、全固体電池の実現に向けた研究においては様々な固体電解質が開発された。高田氏はこれら固体電解質の特性が電池性能に結び付いていない点にいち早く着目し、材料物性を電池性能として発揮するための電池の基本設計構築を目指した。この取り組みにおいて、固体電解質の骨格構成元素と耐酸化・還元性の関係を明確化し、黒鉛負極と LiCoO_2 正極の組み合わせを全固体電池において実現することで、全固体電池においてリチウムイオン電池と同等のエネルギー密度を達成した。

一方の出力密度の低さは全固体電池を実現するうえでの最大の課題であり、固体電解質のイオン伝導性が液体電解質に比べて劣ることがその原因とされていた。そのために、ほとんどの研究者が固体電解質のイオン伝導性向上を通じてこの課題解決に取り組む中、高田氏は全く異なったアプローチによりこの課題を解決に導いた。全固体電池の出力性能が低い原因が、正極界面において固体電解質のイオン伝導度が大きく低下するためであることを見出し、このイオン伝導特性の異常が正極界面にリチウムイオンの欠乏層が形成されるという洞察に基づき、酸化物系固体電解質の薄層を正極界面に介在させるというきわめて独創性の高い界面構造を創出した。この界面構造により出力性能は大幅に向上し、全固体電池はエネルギー密度、出力密度とも、リチウムイオン電池に匹敵するものとなった。

このように、現在車載用電池としての実用化を間近にひかえて精力的な開発が進められている全固体電池の基本設計を確立した業績により、高田氏を2025年度つくば賞の受賞者に決定した。

Research Theme, Background and Achievements

Research Theme “Research and development of solid-state batteries”

Research Background and Achievements The lithium-ion batteries have not only spread notebook computers and mobile phones, leading to the creation of an advanced information society, but also opened the way to electric vehicles and efficient storage of renewable energy aiming at realizing a low-carbon society. However, scaling-up of lithium-ion batteries for the latter applications raises safety concerns, because they use flammable organic solvents. Solid-state batteries, which employ nonflammable solid electrolytes, had been expected to be a fundamental solution to this issue, but their energy density and power density had long fallen far short of those of lithium-ion batteries.

To break through this situation, Dr. Kazunori Takada first set out to improve the energy density. A major difference between lithium-ion batteries and solid-state batteries is, of course, whether their electrolyte is liquid or solid, and thus various solid electrolytes have been developed in research aiming at realizing solid-state batteries. Dr. Takada quickly recognized that improved properties in solid electrolytes had not improved battery performance. He therefore aimed to establish a battery design that enables material properties to be fully expressed as battery performance. In this effort, he clarified the relationship between the framework elements of solid electrolytes and their electrochemical stability and implemented the combination of a graphite anode and a LiCoO_2 cathode in a solid-state battery. This battery design has increased its energy density comparable to that of lithium-ion batteries.

The low power density had been the greatest challenge to the practical realization of solid-state batteries, and it had been attributed to the inferior ionic conductivity of solid electrolytes relative to liquid electrolytes; therefore, most researchers were seeking to solve this problem through improving ionic conductivity. On the other hand, Dr. Takada took a quite different approach to overcoming this problem. He found that the low power densities of solid-state batteries come from a significant decrease in ionic conductivity of the solid electrolyte at the cathode interface. He gained an insight that this anomalous ionic-conduction originates from the formation of a lithium-ion depletion layer at the cathode interface and devised an original interfacial structure in which a thin layer of oxide-based solid electrolyte is interposed at the cathode interface based on his insight. This interfacial structure has dramatically improved power performance to provide practical energy and power densities to solid-state batteries.

These achievements have established the fundamental design of solid-state batteries, which are now under vigorous development for vehicle application. For these accomplishments, Dr. Takada has been selected as a recipient of the Tsukuba Prize for 2025.

2025年度 つくば奨励賞（実用化研究部門）

2025 Tsukuba Encouragement Prize (Reserch for Practical Use)



博士（工学） Wu Rudder（ウー ラダー）氏（1981年生）

物質・材料研究機構 構造材料研究センター

材料創製分野 超耐熱材料グループ 主任研究員

株式会社Thermalytica 創業者兼最高技術責任者

Rudder Wu, Ph.D.

Senior Researcher, National Institute for Materials Science, Research Center for Structural Materials, Materials Manufacturing Field,
High Temperature Materials Group

Founder & Chief Technology Officer, Thermalytica Inc.

受賞の対象となった研究主題および研究内容

研究主題 「持続可能な未来を支える革新的なマテリアル・イノベーション：TIISA®断熱材技術の展開と社会実装」

研究内容 世界のエネルギー消費の約4分の3は最終的に熱として失われているとされ、産業プロセス、建築、輸送、冷熱インフラなど幅広い領域で、熱損失の削減と省エネルギー化が喫緊の課題となっている。しかし従来の断熱材は、厚さや重量の増大、性能劣化、複雑形状や既存設備への適用困難性など、構造・材料双方に起因する制約が大きく、「断熱を強化したくても現場要件を満たせない」という状況が長らく続いてきた。

こうした課題を打破するため、多孔質構造内部における気体熱伝導をナノスケールで制御し、固体熱伝導・気体熱伝導・輻射伝熱を同時に抑制するハイブリッド・エアロゲル機構を構築したのが、TIISA®（Thermal Insulation Inflatable Solid Air）である。TIISA®は約数十nm級の粒子から構成され、粒子間に形成される安定ナノギャップと空気層がフォノン散乱を極大化し、固体熱の伝達経路を大幅に抑制する。これにより、世界最高水準の低熱伝導率を達成している。

TIISA®の技術的強みは、材料単体としての超断熱性能に留まらず、塗膜・シート・コンポジットなど多様な形態へ展開できる点にある。これにより、既存設備や狭隘空間、複雑形状への適用が可能となり、従来材料では実現できなかった断熱設計を可能にする。こうしたスケールアップ、実証実験、社会実装に関する取り組みは、NIMS発ベンチャー企業である株式会社Thermalyticaを通じて推進されている。

これらの研究開発を牽引してきたのがウー・ラダー氏である。ウー氏はNIMSにおける基礎研究を起点として、TIISA®の材料設計、物性評価、スケールアップ、実証実験、社会実装を一貫して推進してきた。また、TIISA®を用いた室内型スポーツ施設の外装塗料施工では施設内の温度管理負荷を軽減し、快適性向上に寄与するとともに、海外の大規模養鶏施設での施工では産業現場における有効性を裏付けている。つくば市との共同実証では、TIISA®施工により夏季26.2%、冬季14.6%の電力消費削減を達成し、公共・産業施設における省エネ効果を明確化した。さらに、ウクライナ復興再建支援プロジェクト（UNIDO「Green Industrial Recovery Programme for Ukraine」）において、寒冷地域の断熱課題解決への応用可能性を示し、国際的な社会課題への貢献も進めている。

これらの成果は海外でも高く評価されており、2023年にはシンガポール政府主催の世界最大級のスタートアップコンテスト「SLINGSHOT」において、150カ国・地域から参加した4,700社のスタートアップの中からグランプリを受賞した。さらに2024年には「KPMG Global Tech Innovator Competition」で世界優勝を果たすなど、同氏は日本企業として初めてこれらの受賞を次々に達成した。研究成果を起点として社会実装までを統合的に推進した同氏の取り組みは、エネルギー利用の高度化、地域産業の振興、スタートアップ創出という観点からも極めて大きな意義を有する。

以上の優れた業績により、ウー・ラダー氏を2025年度つくば奨励賞（実用化研究部門）の受賞者に決定した。

Research Theme, Background and Achievements

Research Theme “Innovative Materials for a Sustainable Future: Development and Social Implementation of TIISA® Insulation Technology”

Research Background and Achievements A significant portion of global final energy consumption, estimated at nearly three-quarters, is ultimately lost as heat. Reducing thermal losses and improving energy efficiency have thus become urgent challenges across industrial, building, and mobility sectors. Conventional insulation materials face limitations such as insufficient performance under extreme temperatures, difficulty in application to complex geometries, and constraints on thickness or weight. As a result, many facilities face a persistent dilemma: they desire enhanced thermal insulation, but cannot achieve it due to space, weight, or cost restrictions.

To overcome these structural limitations, Dr. Rudder Wu devised a hybrid aerogel structure that controls gas-phase heat transport at the nanoscale, leading to the development of TIISA® (Thermal Insulation Inflatable Solid Air). TIISA® is composed of particles approximately several tens of nanometers in size, which form stable nanogaps and air layers between particles, maximizing phonon scattering and achieving one of the world’s lowest thermal conductivities. The material’s networked particle structure and intrinsic nanoscale design significantly suppress heat transfer, making it highly effective in minimizing energy losses.

The research and development efforts have been led by Dr. Rudder Wu, who, starting from fundamental research at NIMS, has consistently advanced the material design, property evaluation, scale-up, demonstration testing, and societal implementation of TIISA®. In a collaborative demonstration with Tsukuba City, TIISA® implementation achieved a reduction of 26.2% in electricity consumption during summer and 14.6% during winter, demonstrating its energy-saving benefits in public and industrial facilities. Furthermore, the application of TIISA® as an exterior coating for indoor sports facilities contributed to reduced temperature management loads and improved comfort, while its implementation at large-scale poultry farms overseas demonstrated its effectiveness in industrial settings. Additionally, in the Ukraine Green Industrial Recovery Programme funded by UNIDO, TIISA® demonstrated potential for addressing insulation challenges in cold regions, contributing to solutions for international social issues.

These achievements have received strong international recognition. In 2023, Dr. Wu’s work won the grand prize at SLINGSHOT, one of the world’s largest startup competitions organized by the Singapore government, selected from 4,700 startups representing 150 countries and regions. In the following year, he secured the global championship in the KPMG Private Enterprise Global Tech Innovator Competition 2024, marking the first time a Japanese company has attained these honors. By advancing research outcomes through social implementation in an integrated manner, Dr. Wu’s efforts demonstrate considerable significance for enhancing energy efficiency, revitalizing regional industries, and fostering the creation of deep-tech startups.

For these outstanding achievements, Dr. Rudder Wu has been selected as the recipient of the 2025 Tsukuba Encouragement Award (Research for Practical Use Category).

2025年度 つくば奨励賞（若手研究者部門）

2025 Tsukuba Encouragement Prize (Young Researcher Category)

博士（工学） 海老原 格 氏（1986年生）

筑波大学 システム情報系 准教授／高等研究院（TIAR）／自発研究ユニット フェロー

Dr. Tadashi Ebihara

Associate Professor, University of Tsukuba, Institute of Systems and Information Engineering /

TIAR Fellow, University of Tsukuba, Tsukuba Institute for Advanced Research (TIAR)



受賞の対象となった研究主題および研究内容

研究主題 「水中における通信と測位を実現する音響無線技術に関する研究」

研究内容 地球表面の約70%を占める海洋は、気候変動や生態系保護、資源管理など地球規模の課題解決において重要な役割を果たしている。このような中、海中IoT（Internet of Things）は、海洋環境のモニタリングや資源管理、災害予測などにおいて不可欠な技術であり、その実現には安定した通信と高精度な測位が不可欠である。水中では電波がほとんど伝わらないため、代わりに音波を用いた無線通信や測位が行われる。しかし、音波は電波より遙かに遅く、信号を劣化させるマルチパス（海面・海底反射によるエコー）やドップラーシフト（海面の揺動や送受信機の移動による周波数シフト）の影響が大きいため、陸上無線技術をそのまま適用することは容易ではなかった。

海老原氏は、陸上よりも遙かに過酷な水中の環境に適した新しい音響無線技術を確立した。第一に、マルチパスとドップラーによって信号が時間-周波数空間で大きく歪むことに着目し、信号を時間-周波数空間に配置することで、受信機が空間の歪みを計測・復元できる無線技術を構築した。第二に、水中環境の時変動が陸上より大きなことに着目し、単一アンテナから信号を反復送信し受信機側で合成することで小型・安定・高品質な移動体通信が出来ることを実証した。第三に、磁気測位のアイデア（実観測信号と事前予測信号を比較して大凡の位置を推定する）を活用し、大凡の位置に基づいて直達波の後に遅れて来る反射波だけを効率よく除去してから三辺測量を行う技術を構築し、水中での高精度測位を実証した。これらの研究は、いずれも実海域における実証実験にまで到達している。

このように、海老原氏は、電波がほとんど伝わらない水中において、解決の鍵となる音波を利用した無線技術により、効率的かつ安定した通信や測位技術の開発に大きく貢献している。上記の成果は、大きな社会インパクトがある技術として高く評価されており、数多くの著名学術誌に掲載されたほか、国内外で多数の受賞歴がある。本研究は、水中における通信と測位の新しいあり方の一つを示すものであり、水中IoTの実現に向けた新しい無線インフラの確立に繋がると期待できる。

以上の優れた業績により、海老原氏を2025年度つくば奨励賞（若手研究者部門）の受賞者に決定した。

Research Theme, Background and Achievements

Research Theme “Research on Acoustic Wireless Technology for Underwater Communication and Positioning”

Research Background and Achievements Covering about 70% of the Earth’s surface, the oceans play a crucial role in addressing global challenges such as climate change, ecosystem conservation, and resource management. In this context, the underwater Internet of Things (IoT) is an indispensable technology for ocean environment monitoring, resource management, and disaster prediction. However, in order to accomplish this, stable communication and high-precision positioning are essential.

Because radio waves hardly propagate underwater, acoustic waves are used instead for wireless communication and positioning. However, since acoustic waves travel much more slowly than radio waves and are strongly affected by multipath (echoes caused by reflections from the sea surface and seafloor) and Doppler effects (frequency shifts caused by sea surface motion or movement of transmitters/receivers), it is not easy to directly apply terrestrial wireless technologies underwater.

Dr. Tadashi Ebihara has established a new acoustic wireless communication technology suited to the far harsher underwater environment. First, he focused on the fact that multipath and Doppler effects cause significant distortion of signals in the time–frequency domain, and developed a wireless technique that organizes signals in this domain so that the receiver can measure and counteract such distortions. Second, noting that the underwater environment varies much more over time than the terrestrial environment, he demonstrated that stable, compact, and high-quality mobile communication is possible by repeatedly transmitting signals from a single antenna and combining them at the receiver. Third, drawing inspiration from magnetic positioning, which estimates an approximate position by comparing measured signals with predicted ones, he developed a method that first removes reflected waves arriving after the direct path based on the rough position estimate, and then performs trilateration, thereby achieving high-precision positioning underwater. All of these steps have been successfully verified through field experiments in real marine environments.

Through these achievements, Dr. Ebihara has made significant contributions to the development of efficient and stable communication and positioning technologies using acoustic waves – the key to overcoming the challenge of radio waves’ limited propagation underwater. His work has been highly acclaimed as a technology with great social impact. Additionally, it has been published in numerous prestigious academic journals, and recognized with many awards both in Japan and abroad. This research represents a new approach to underwater communication and positioning and is expected to lead to the establishment of a new wireless infrastructure for realizing the underwater IoT.

For these outstanding achievements, Dr. Tadashi Ebihara has been selected as the recipient of the 2025 Tsukuba Encouragement Prize (Young Researcher Category).

江崎玲於奈賞歴代受賞者一覧

※所属は受賞当時

江崎玲於奈賞

2004 (第1回)	『半導体ナノエレクトロニクス素子の先駆的研究, 特に, 量子細線・量子ドット構造素子研究における先駆的貢献』 東京大学 生産技術研究所 教授 東京大学 先端科学技術研究センター 教授	榊 裕之氏 荒川 泰彦氏
2005 (第2回)	『ナノバイオインターフェイス設計による細胞シート工学の創生』 東京女子医科大学 先端生命医科学研究所 所長・教授	岡野 光夫氏
2006 (第3回)	『量子ナノ構造の電子物性理論の先駆的研究』 東京工業大学 理工学研究科物性物理学専攻 教授	安藤 恒也氏
2007 (第4回)	『人工原子・分子の実現と量子コンピューターへの挑戦』 東京大学 大学院工学系研究科物理工学専攻 教授	樽茶 清悟氏
2008 (第5回)	『表面およびナノ構造物質の顕微観察法の開発と新規物性の開拓』 東京工業大学 大学院理工学研究科物性物理学専攻 教授	高柳 邦夫氏
2009 (第6回)	『ナノスケールで制御されたフォトニック結晶の先導的研究』 京都大学 大学院工学研究科電子工学専攻 教授 (兼任) 京都大学 光・電子理工学教育研究センター センター長	野田 進氏
2010 (第7回)	『自己組織化によるナノ構造物質創成の先駆的研究』 東京大学 大学院工学系研究科応用化学専攻 教授	藤田 誠氏
2011 (第8回)	『近接場ナノ光学とプラズモニクス研究の開拓』 大阪大学 大学院工学研究科応用物理学専攻 教授 理化学研究所 基幹研究所 主任研究員	河田 聡氏
2012 (第9回)	『高分子ナノ構造を用いた薬物・遺伝子キャリアの開拓と難治疾患標的治療への展開』 東京大学 大学院工学系研究科マテリアル工学専攻 教授 東京大学 大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター 教授	片岡 一則氏
2013 (第10回)	『革新的な多孔性金属錯体の開発』 京都大学 物質-細胞統合システム拠点拠点長 京都大学 大学院工学研究科合成・生物化学専攻教授	北川 進氏
2014 (第11回)	『超伝導量子ビットシステムの研究』 理化学研究所 創発物性科学研究センター量子情報エレクトロニクス部門巨視的量子コヒーレンス研究チーム チームリーダー 東京大学 先端科学技術研究センター 教授 理化学研究所 創発物性科学研究センター量子情報エレクトロニクス研究部門超伝導量子エレクトロニクス研究チーム チームリーダー (兼務)	蔡 兆申氏 中村 泰信氏
2015 (第12回)	『有機分子材料のメソスケール構造制御と新機能発現』 東京大学 大学院工学系研究科化学生命工学専攻 教授	相田 卓三氏
2016 (第13回)	『強磁性物質におけるスピンの電氣的制御と素子応用に関する先導的研究』 東北大学 電気通信研究所 所長・教授	大野 英男氏
2017 (第14回)	『光格子時計の考案, 実証および高精度化』 東京大学 大学院工学系研究科物理工学専攻 教授 理化学研究所 香取量子計測研究室 主任研究員	香取 秀俊氏
2018 (第15回)	『テラヘルツ技術の開拓によるナノ構造の電子物性解明の先導的研究』 東京大学 生産技術研究所 教授	平川 一彦氏

江崎玲於奈賞

2019 (第16回)	<p>『伸縮性と生体親和性をもつ新しい有機半導体エレクトロニクスの開拓』</p> <p>東京大学 大学院工学系研究科 教授 理化学研究所 開拓研究本部 主任研究員 理化学研究所 創発物性科学研究センター チームリーダー</p> <p style="text-align: right;">染谷 隆夫 氏</p>
2020 (第17回)	<p>『半導体ナノ構造における核スピンの電子的制御と量子情報技術への応用の研究』</p> <p>東北大学 大学院工学系研究科 教授 東北大学 先端スピントロニクス研究開発センター センター長 量子科学技術研究開発機構 高崎量子応用研究所 研究統括</p> <p style="text-align: right;">平山 祥郎 氏</p>
2021 (第18回)	<p>『カーボンナノチューブの電子状態と共鳴ラマン分光の理論』</p> <p>東北大学 大学院理学研究科 物理学専攻 教授</p> <p style="text-align: right;">齋藤 理一郎 氏</p>
2022 (第19回)	<p>『植物由来の完全分散化セルロースナノファイバーの創製と応用に関する研究』</p> <p>東京大学 特別教授室 特別教授 東京大学 名誉教授 (元 大学院農学生命科学研究科 教授)</p> <p style="text-align: right;">磯貝 明 氏</p>
2023 (第20回)	<p>『スピン渦結晶の直接観察とその物性の研究』</p> <p>理化学研究所 創発物性科学研究センター センター長 理化学研究所 創発物性科学研究センター 電子状態マイクロコピー研究チーム チームリーダー</p> <p style="text-align: right;">十倉 好紀 氏 于 秀珍 氏</p>
2024 (第21回)	<p>『高速原子間力顕微鏡の開発とタンパク質分子の機能動態機構解明への展開』</p> <p>金沢大学 ナノ生命科学研究所 特任教授 金沢大学 特別功績教授/名誉教授</p> <p style="text-align: right;">安藤 敏夫 氏</p>
2025 (第22回)	<p>『有機二重ヘテロ構造の構築と新しい発光分子の創製による有機LEDの高性能化』</p> <p>九州大学大学院工学研究院応用化学部門 主幹教授 (最先端有機光エレクトロニクス研究センター センター長)</p> <p style="text-align: right;">安達 千波矢 氏</p>

つくば賞・つくば奨励賞歴代受賞者一覧

※所属は受賞当時

つくば賞		つくば奨励賞	
1989 (第1回)	『100Kを越える酸化物高温超電導体の発見』 金属材料技術研究所筑波支所 総合研究官 前田 弘 氏		
1990 (第2回)	『エンドセリンの発見』 筑波大学 基礎医学系 教授 眞崎 知生 氏 教授 後藤 勝年 氏 講師 木村 定雄 氏 講師 柳沢 正史 氏 工業技術院微生物工業技術研究所 室長 三井 洋司 氏 東京大学 医学部 助教授 矢崎 義雄 氏 医員 栗原 裕基 氏 武田薬品工業株式会社 筑波研究所 所長 藤野 政彦 氏	1990 (第1回)	『光制御機能を有する高分子膜の開発』 住友化学工業株式会社 筑波研究所 主任研究員 北山慎一郎 氏 副主任研究員 白神 昇 氏 研究員 穂積 滋郎 氏
1991 (第3回)	『ジョセフソンコンピュータの開発』 工業技術院 電子技術総合研究所 電子デバイス部超伝導エレクトロニクス研究室 室長 高田 進 氏 極限技術部超伝導技術研究室 室長 幸坂 紳 氏 電子デバイス部超伝導エレクトロニクス研究室 主任研究官 黒澤 格 氏 研究員 青柳 昌宏 氏 主任研究官 仲川 博 氏 情報アーキテクチャ部情報ベース研究室 室長 岡田 義邦 氏 分散システム研究室 主任研究官 濱崎 陽一 氏	1991 (第2回)	【実用化研究部門】 『発酵法によるエリスリトール生産技術の開発』 食品総合研究所 酵素利用研究室 室長 春見 隆文 氏 ----- 【若手研究者部門】 『大強度負重イオン発生装置の研究』 高エネルギー物理学研究所 加速器研究部加速器第一研究系 助教授 森 義治 氏
1992 (第4回)	該当者なし	1992 (第3回)	【実用化研究部門】 『原子炉解体ロボット技術の開発』 日本原子力研究所 東海研究所 原子炉工学部 原子炉制御研究室長 篠原 慶邦 氏 課長代理 白井 甫積 氏 主査・課長代理 藤井 義雄 氏 ----- 【若手研究者部門】 『リボザイムの触媒機能に関する理論及び応用研究』 工業技術院 微生物工業技術研究所 主任研究官 多比良和誠 氏
1993 (第5回)	『放射光の蛋白質結晶学への応用』 高エネルギー物理学研究所 教授 坂部 知平 氏	1993 (第4回)	【実用化研究部門】 『視覚情報システムの研究 - 3次元オプトメータの開発と応用 -』 工業技術院 生命工学工業技術研究所 人間情報部 行動制御研究室長 武田 常廣 氏 『光照射を利用したゾルゲル法による機能性セラミック 薄膜の低温成膜技術の開発』 株式会社 日立製作所 日立研究所 材料第3部無機材料研究室 研究員 大石 知司 氏 企画員 前川 幸子 氏 企画員 石川 敬郎 氏 ----- 【若手研究者部門】 『地球表面と大気間のエネルギーと水の輸送過程に 関する研究』 筑波大学 地球科学系 助手 杉田 倫明 氏

つくば賞

つくば奨励賞

<p>1994 (第6回)</p>	<p>『がん遺伝子が持つ細胞制御機能の多様性に関する研究』 理化学研究所 ライフサイエンス筑波研究センター 分子腫瘍学研究室 主任研究員 井川 洋二 氏</p>	<p>1994 (第5回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『下水汚泥のエネルギー自立型油化処理プロセスの開発』 工業技術院資源環境技術総合研究所 温暖化物質循環制御部 部長 横山 伸也 氏 バイオマス研究室 室長 小木 知子 氏 研究員 美濃輪智朗 氏 オルガノ株式会社 総合研究所 所長 中村 忠 氏 SCWOチーム長 鈴木 明 氏 環境事業部 係長 伊藤 新治 氏</p>
<p>1995 (第7回)</p>	<p>『つくば高血圧マウスとつくば低血圧マウスの創作とその解析』 筑波大学 応用生物化学系 教授 村上 和雄 氏 助教授 宮崎 均 氏 助教授 深水 昭吉 氏 講師 谷本 啓司 氏 基礎医学系 助教授 八神 健一 氏 助手 杉山 文博 氏</p>	<p>1995 (第6回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『中性子イメージングプレートの開発と応用』 日本原子力研究所 先端基礎研究センター 生体物質中性子回折研究グループ グループ・リーダー 新村 信雄 氏</p> <p>【若手研究者部門】 『増殖因子の新たな作用メカニズムと新たな機能の研究』 工業技術院生命工学工業技術研究所 生体情報部細胞機能研究室 主任研究員 今村 亨 氏</p>
<p>1996 (第8回)</p>	<p>『水素結合の量子力学現象の発見』 工業技術院物質工学工業技術研究所 極限反応部高压化学研究室 室長 青木 勝敏 氏 主任研究員 山脇 浩 氏 研究員 藤久 裕司 氏 研究員 坂下 真実 氏</p>	<p>1996 (第7回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『簡便な冠動脈造影法の開発……放射光による面状単色X線ビームの生成と臨床応用』 高エネルギー物理学研究所 放射光実験施設 教授 安藤 正海 氏 筑波大学臨床医学系 循環器内科 教授 杉下 靖郎 氏 放射線科 教授 板井 悠二 氏 同講師 武田 徹 氏 循環器内科 講師 大塚 定徳 氏 高エネルギー物理学研究所 放射光実験施設 助手 兵藤 一行 氏</p> <p>【若手研究者部門】 『動物における生殖細胞形成機構』 筑波大学 生物化学系遺伝子実験センター 講師 小林 悟 氏</p>
<p>1997 (第9回)</p>	<p>該当者なし</p>	<p>1997 (第8回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『温度補償型位相差フィルムの開発』 住友化学工業株式会社 筑波研究所 研究員 桑原 真人 氏 主任研究員 野口 公信 氏 首席研究員 大西 敏博 氏 基礎化学品研究所 研究員 黒岩 秀夫 氏 首席研究員 坂倉 和明 氏</p> <p>【若手研究者部門】 『原子線ホログラフィによる次世代超微細加工技術の研究』 日本電気株式会社 基礎研究所 研究専門課長 藤田 淳一 氏</p> <p>『アトムプローブによる実用金属材料の超微細組織形成機構の解明』 金属材料技術研究所 物性解析研究部 主任研究員 宝野 和博 氏</p>

つくば賞

つくば奨励賞

<p>1998 (第10回)</p>	<p>『カーボンナノチューブの発見』 日本電気株式会社 研究開発グループ 主席研究員 飯島 澄男 氏</p>	<p>1998 (第9回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『テーブルトップ密着型X線顕微鏡システムの開発』 工業技術院電子技術総合研究所 超分子部 主任研究官 清水 秀明 氏 主任研究官 眞島 利和 氏 主任研究官 山田 雅弘 氏 極限技術部 主任研究官 富江 敏尚 氏 主任研究官 三浦 永祐 氏 工業技術院産業技術融合領域研究所 アトムテクノロジーグループ長 金山 敏彦 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『情報理論を用いた小脳による運動制御機構の解明』 工業技術院電子技術総合研究所 情報科学部 主任研究官 北澤 茂 氏</p>
<p>1999 (第11回)</p>	<p>『共鳴X線散乱による軌道秩序の直接的観測』 高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所 助教授 村上 洋一 氏</p>	<p>1999 (第10回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『超臨界流体を利用した環境保全技術の研究開発』 工業技術院物質工学工業技術研究所 化学システム部超臨界流体工学グループ グループリーダー 佐古 猛 氏</p> <p>『電気自動車（EV）用リチウムイオン電池の開発』 株式会社日立製作所 日立研究所エネルギー素子研究部 電池システムグループ 主任研究員 葛西 昌弘 氏 研究員 後藤 明弘 氏 主任研究員 安藤 寿 氏 研究員 西村 勝憲 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『植物が昆虫の食害から身を守る攻防に関わる化学物質の解明』 蚕糸・昆虫農業技術研究所 生産技術部人工飼料研究室 研究員 今野浩太郎 氏</p>
<p>2000 (第12回)</p>	<p>『大量高速遺伝子（cDNA）解析技術の開発とそれを用いた遺伝子辞書の作成』 理化学研究所 ゲノム科学総合研究センター 遺伝子構造・機能研究グループ プロジェクトディクター 林崎 良英 氏</p>	<p>2000 (第11回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『カーボンナノチューブの量産技術と応用の開発』 工業技術院物質工学工業技術研究所 化学システム部反応工学研究室 室長 湯村 守雄 氏 主任研究官 大嶋 哲 氏 研究官 吾郷 浩樹 氏 主任研究官 内田 邦夫 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『睡眠・覚醒及び摂食行動の制御におけるオレキシンの生理的役割の解明』 筑波大学 基礎医学系 助教授 桜井 武 氏</p> <p>『進化したアナログLSIの研究開発』 工業技術院電子技術総合研究所 情報アーキテクチャ部 研究員 村川 正宏 氏</p>
<p>2001 (第13回)</p>	<p>『らせん状共役系高分子の創成と開拓』 筑波大学 物質工学系 教授 赤木 和夫 氏</p>	<p>2001 (第12回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『燃焼合成法による金属間化合物製造技術の研究開発』 物質・材料研究機構材料研究所 燃焼合成研究チーム リーダー 海江田義也 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『電圧感受性チャンネルの構造解明』 産業技術総合研究所 脳神経情報研究部門構造生理研究グループ グループリーダー 佐藤 主税 氏</p>

つくば賞

つくば奨励賞

<p>2002 (第14回)</p>	<p>『環境ストレス応答に関わる植物遺伝子群の機能，発現の解明とストレス耐性植物の開発』 理化学研究所 筑波研究所 植物分子生物学研究室 主任研究員 篠崎 一雄 氏 国際農林水産業研究センター 主任研究官 篠崎 和子 氏</p>	<p>【実用化研究部門】 『超高濃度オゾン発生・供給装置の開発と応用分野開拓』 産業技術総合研究所 極微プロファイル計測研究ラボ ラボ長 一村 信吾 氏 主任研究員 野中 秀彦 氏 主任研究員 黒河 明 氏 主任研究員 中村 健 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『単結晶強磁性トンネル素子』 産業技術総合研究所 エレクトロニクス研究部門 スピンエレクトロニクスグループ 主任研究員 湯浅 新治 氏</p>
<p>2004 (第15回)</p>	<p>『ジーンディスカバリー技術の創製とハイスループット機能遺伝子同定』 産業技術総合研究所 ジーンファンクション研究センター センター長 多比良和誠 氏 研究員 宮岸 真 氏 研究員 川崎 広明 氏 研究員 藁科 知子 氏</p>	<p>【実用化研究部門】 『軽量ロングマット水耕苗による革新的次世代田植え技術の開発』 農業・生物系特定産業技術研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター 基礎技術研究部長 小倉 昭男 氏 中央農業総合研究センター 主任研究官 北川 壽 氏 九州沖縄農業研究センター 水田作研究部機械化研究室長 田坂 幸平 氏 中央農業総合研究センター 主任研究官 白土 宏之 氏 東北農業研究センター 野菜花き作業技術研究室長 屋代 幹雄 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『電顕下マイクロ組立法によるフォトリソグラフィ結晶の研究』 物質・材料研究機構 材料研究所 機能融合材料グループ 主幹研究員 宮崎 英樹 氏</p>
<p>2005 (第16回)</p>	<p>『新ナノチューブの創製とナノ温度計の発見』 物質・材料研究機構 フェロー・若手国際研究拠点センター センター長 板東 義雄 氏 ナノマテリアル研究所ナノシンセシスグループ アソシエートディレクター デミトリー・ゴルバグ 氏 物質研究所超微細構造解析グループ 特別研究員 高 義華 氏</p>	<p>【実用化研究部門】 『欠陥制御による高光機能単結晶および光機能素子の開発』 物質・材料研究機構 物質研究所光学単結晶グループ ディレクター 北村 健二 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『新しい原理による巨大電歪効果の発見』 物質・材料研究機構 材料研究所基礎物性グループ 主幹研究員 任 暁兵 氏</p>
<p>2006 (第17回)</p>	<p>『微生物ストレス応答の先駆的研究と「リボゾーム工学」の創出』 農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 食品バイオテクノロジー研究領域 生物機能解析ユニット長 越智 幸三 氏</p>	<p>【実用化研究部門】 『緊急地震速報のための地震情報即時解析システムの開発』 防災科学技術研究所 防災システム研究センター 総括主任研究員 堀内 茂木 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『有機高分子への自在金属集積の実現と機能化』 物質・材料研究機構ナノ有機センター 機能モジュールグループ 主幹研究員 樋口 昌芳 氏</p> <p>『新規強磁性半導体を用いたデバイス応用に関する研究』 産業技術総合研究所 エレクトロニクス研究部門 スピントロニクスグループ 研究員 齋藤 秀和 氏</p>

つくば賞

つくば奨励賞

<p>2007 (第18回)</p>	<p>『環境適応・応答の分子機構の解明』 東北大学 大学院医学系研究科 教授 筑波大学 先端学際領域研究センター 客員教授 山本 雅之 氏</p>	<p>2007 (第17回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『白色LED用途に適したサイアロン蛍光体の開発』 物質・材料研究機構 ナノセラミックスセンター窒化物粒子グループ グループリーダー 廣崎 尚登 氏 主幹研究員 解 栄軍 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『鋳型を用いないRNA合成酵素の分子構造基盤研究』 産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門機能性核酸研究グループ長 東京大学 大学院新領域創成科学研究科 メディカルゲノム専攻生物機能工学分野連携客員 准教授 富田 耕造 氏</p>
<p>2008 (第19回)</p>	<p>『無機ナノシートの創製とその集積化による機能性材料の開発』 物質・材料研究機構 国際ナノアーキテクトニクス研究拠点 主任研究者 佐々木高義 氏 MANA研究者 長田 実 氏</p>	<p>2008 (第18回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『角度標準の普及と自己校正機能付きロータリエンコーダの開発』 産業技術総合研究所 企画本部戦略経営室総括主幹 計測標準研究部門長さ計測科幾何標準研究室付 渡部 司 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『スーパーグロース 一革新的カーボンナノチューブ合成法』 産業技術総合研究所 ナノチューブ応用研究センター スーパーグロースCNTチーム長 畠 賢治 氏</p>
<p>2009 (第20回)</p>	<p>『MgOトンネル素子の巨大トンネル磁気抵抗効果の実現と産業応用』 産業技術総合研究所 エレクトロニクス研究部門 スピントロニクスグループ 研究グループ長 湯浅 新治 氏 大阪大学 大学院 基礎工学研究科 物質創成専攻 教授 鈴木 義茂 氏</p>	<p>2009 (第19回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『過活動膀胱(OAB)治療剤ソリフェナシンの研究開発と企業化』 アステラス製薬株式会社 研究本部 化学研究所 所長 竹内 誠 氏 創薬化学第七研究室 主管研究員 内藤 良 氏 薬理研究所 免疫炎症研究室 主席研究員 池田 賢 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『変異型ミトコンドリアゲノム関連疾患の逆遺伝学的研究』 筑波大学 大学院生命環境科学研究科 准教授 中田 和人 氏</p>
<p>2010 (第21回)</p>	<p>『軽元素を可視化する超高感度電子顕微鏡技術の開発』 産業技術総合研究所 ナノチューブ応用研究センター カーボン計測評価チーム 研究チーム長 末永 和知 氏</p>	<p>2010 (第20回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『渋皮が容易に剥皮できるニホングリ品種「ぼろたん」の育成』 農業・食品産業技術総合研究機構 果樹研究所 ナシ・クリ核果類研究チーム チーム長 齋藤 寿広 氏 農業技術研究機構果樹研究所 ナシ・クリ育種研究室 室長 壽 和夫 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『次世代医療に貢献する生体組織接合材料技術の開発』 物質・材料研究機構 生体材料センター 生体材料システム化グループ 主幹研究員 田口 哲志 氏</p>
<p>2011 (第22回)</p>	<p>『糖鎖研究の基盤ソールの開発から実用化に至るまでの一連の戦略的研究』 産業技術総合研究所 糖鎖医学研究センター 研究センター長 成松 久 氏</p>	<p>2011 (第21回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『マルチパラメータレーダによる降雨量推定手法の開発』 防災科学技術研究所 観測・予測研究領域長 眞木 雅之 氏 同領域 水・土砂防災研究ユニット 総括主任研究員 岩波 越 氏 主任研究員 前坂 剛 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『沿岸域の堆積物を用いた巨大地震の履歴解明に関する研究』 産業技術総合研究所 活断層・地震研究センター 海溝型地震履歴研究チーム 主任研究員 澤井 祐紀 氏</p>

つくば賞

つくば奨励賞

<p>2012 (第23回)</p>	<p>『格子量子色力学に基づく核力の研究』 筑波大学 大学院 数理解物質科学研究科 物理学専攻 教授 青木 慎也 氏 筑波大学 計算科学研究センター 准教授 石井 理修 氏 理化学研究所 仁科加速器研究センター 主任研究員/副センター長 初田 哲男 氏</p>	<p>2012 (第22回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『定量NMR法による革新的計量トレーサビリティ供給システムの開発』 産業技術総合研究所 計測標準研究部門 計量標準システム科 化学計量システム研究室 主任研究員 齋藤 剛 氏 室長 井原 俊英 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『希少元素の有効活用に向けた新しいナノポーラス金属の開発』 物質・材料研究機構 WP I 国際ナノアーキテクトニクス研究拠点 独立研究者 山内 悠輔 氏</p>
<p>2013 (第24回)</p>	<p>『哺乳類ミトコンドリアゲノムの生理基盤とその破綻病理に関する研究』 筑波大学 生命環境系 生物科学専攻 教授 林 純一 氏</p>	<p>2013 (第23回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『鋼のナノ組織化を用いた高強度精密ねじの量産化を世界で初めて実現 -CO₂排出量50%削減に成功-』 物質・材料研究機構 中核機能部門 材料創製・加工ステーション ステーション長 物質・材料研究機構 環境・エネルギー部門 材料信頼性 料創製・信頼性グループ グループリーダー 鳥塚 史郎 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『超高感度ナノメカニカル膜型表面応力センサー (MSS)の開発』 物質・材料研究機構 WP I 国際ナノアーキテクトニクス研究拠点 独立研究者 吉川 元起 氏</p>
<p>2014 (第25回)</p>	<p>『形状記憶合金の実用特性の発明と先駆的研究展開』 筑波大学 数理解物質系 物質工学域 教授 宮崎 修一 氏</p>	<p>2014 (第24回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『世界最小となる陽子線治療システム用シンクロトロンの開発と実用化』 株式会社日立製作所 日立研究所 エネルギー・環境研究センタ 応用エネルギーシステム研究部 研究員 鮎名風太郎 氏 ユニットリーダー主任研究員 梅澤 真澄 氏 研究員 青木 孝道 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『時間と空間の脳内情報処理機構の研究』 産業技術総合研究所 ヒューマンライフテクノロジー研究部門 システム脳科学研究グループ 主任研究員 山本 慎也 氏</p>
<p>2015 (第26回)</p>	<p>『難治疾患の克服を目指した免疫受容体の研究』 筑波大学 医学医療系・生命領域学際研究センター 教授 澁谷 彰 氏</p>	<p>2015 (第25回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『次世代リン化合物製造法の開発と製品化』 産業技術総合研究所 材料・化学領域 触媒化学融合研究センター ヘテロ原子化学チーム研究チーム長 韓 立彪 氏 片山化学工業株式会社 P開発グループ リーダー 佐賀 勇太 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『超省電力高速スピン制御技術の実現とその応用』 産業技術総合研究所 エレクトロニクス・製造領域 スピントロニクス研究センター 電圧スピントロニクスチーム 主任研究員 野崎 隆行 氏</p>

つくば賞

つくば奨励賞

<p>2016 (第27回)</p>	<p>『ナノ構造制御による先進磁性材料の開発』 物質・材料研究機構 フェロー 磁性・スピントロニクス材料研究拠点長 宝野 和博 氏</p>	<p>2016 (第26回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『従来比10倍の疲労耐久性を有する新合金とその設計指針の開発』 物質・材料研究機構 構造材料研究拠点 社会空間材料分野 振動制御材料グループ グループリーダー 澤口 孝宏 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『夢を生み出すレム睡眠の意義とメカニズムの解明』 筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構 准教授 林 悠 氏</p>
<p>2017 (第28回)</p>	<p>『原子スイッチの発明と実用化のための研究』 物質・材料研究機構 国際ナノアーキテクトニクス研究拠点 MANA主任研究者 寺部 一弥 氏 早稲田大学 理工学術院先進理工学部応用物理学科 教授 長谷川 剛 氏</p> <p>物質・材料研究機構 国際ナノアーキテクトニクス研究拠点 エグゼクティブアドバイザー 青野 正和 氏</p>	<p>2017 (第27回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『モアレを利用したマルチスケール変位・ひずみ分布計測技術の開発』 産業技術総合研究所 計量標準総合センター 分析計測標準研究部門 非破壊計測研究グループ 統括研究主幹 津田 浩 氏 主任研究員 李 志遠 氏 研究員 王 慶華 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『2つのドーパミン神経システムとその神経回路基盤』 筑波大学 医学医療系 教授 松本 正幸 氏</p>
<p>2018 (第29回)</p>	<p>該当者なし</p>	<p>2018 (第28回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『直接水冷型両面冷却パワーモジュールの開発』 株式会社日立製作所 研究開発グループ 制御イノベーションセンタ 主管研究員兼電動システムラボラトリ長 中津 欣也 氏</p> <p>日立オートモティブシステムズ株式会社 パワートレイン&電子事業部 電子設計本部 インバータ設計部 シニアコンサルタント 齋藤 隆一 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『室温高スピンドル分極ハーフメタルホイスラー合金材料に関する先駆的研究』 物質・材料研究機構 磁性・スピントロニクス材料研究拠点 磁性材料グループ グループリーダー 桜庭 裕弥 氏</p>
<p>2019 (第30回)</p>	<p>『白色LED用蛍光体の開発』 物質・材料研究機構 フェロー 廣崎 尚登 氏</p>	<p>2019 (第29回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『レーザー加工機用の優れたファラデー回転子の開発と実用化』 物質・材料研究機構 機能性材料研究拠点 光学単結晶グループ グループリーダー 島村 清史 氏 主任研究員 ガルシア・ビジョラ・エンカルナシオン・アントニア 氏 株式会社フジクラ 光ファイバ事業部 光ファイバ開発部 主査 船木 秋晴 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『難病患者特異的iPS細胞を用いた革新的治療法の創出』 理化学研究所バイオリソース研究センター iPS細胞高次特性解析開発チーム チームリーダー 筑波大学 医学医療系 准教授 (連携大学院) 林 洋平 氏</p>

つくば賞

つくば奨励賞

<p>2020 (第31回)</p>	<p>『我が国初の地質時代名称「チバニアン」承認の礎となった地磁気逆転および古海洋変動復元に関する研究』 茨城大学大学院理工学研究科 理学野 地球環境科学領域 教授 岡田 誠 氏 情報・システム研究機構 国立極地研究所 地圏研究グループ 准教授 総合研究大学院大学 極域科学専攻 准教授 菅沼 悠介 氏 産業技術総合研究所 地質調査総合センター 産総研特別研究員 羽田 裕貴 氏</p>	<p>2020 (第30回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『生物を規範にした接着・コーティング材料の実用化研究』 物質・材料研究機構 統合型材料開発・情報基盤部門 データ駆動高分子設計グループ グループリーダー 内藤 昌信 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『マルチスケール組織解析による金属材料の高性能化に関する研究』 物質・材料研究機構 磁性・スピントロニクス材料研究拠点 主幹研究員 佐々木泰祐 氏</p>
<p>2021 (第32回)</p>	<p>『冬眠様の低体温・低代謝状態を誘導する神経回路の同定』 筑波大学 医学医療系／国際統合睡眠医科学研究機構 教授 櫻井 武 氏</p>	<p>2021 (第31回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『メタロ超分子ポリマーを用いたエレクトロクロミック調光デバイスの開発』 物質・材料研究機構 機能性材料研究拠点 ポリマー・バイオ分野 電子機能高分子グループ グループリーダー 樋口 昌芳 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『細胞外膜小胞を介した微生物間コミュニケーションの研究』 筑波大学 生命環境系 准教授 豊福 雅典 氏</p>
<p>2022 (第33回)</p>	<p>『放射光X線による分子動画像計測法の開発』 高エネルギー加速器研究機構 理事 足立 伸一 氏 物質構造科学研究所 放射光科学第二研究系 准教授 野澤 俊介 氏</p>	<p>2022 (第32回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『FePt-C系熱アシスト磁気記録媒体の開発』 物質・材料研究機構 磁性・スピントロニクス材料研究拠点 磁気記録材料グループ グループリーダー 高橋有紀子 氏 物質・材料研究機構 理事長 宝野 和博 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『高機能性多結晶薄膜の低温合成とデバイス応用に関する研究』 筑波大学 数理物質系 准教授 都甲 薫 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『希少元素を用いない新規高性能永久磁石材料の研究』 物質・材料研究機構 磁性・スピントロニクス材料研究拠点 磁性材料解析グループ 主幹研究員 Sepehri Amin Hossein 氏 (セペリ アミン ホセイン)</p>
<p>2023 (第34回)</p>	<p>『ゲノム編集技術を含む新たな育種技術の基盤構築と社会実装への展開』 筑波大学 生命環境系 教授 江面 浩 氏</p>	<p>2023 (第33回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『膜型表面応力センサ (MSS)を用いた嗅覚センサの総合的研究・開発と社会実装』 物質・材料研究機構 高分子・バイオ材料研究センター バイオ材料分野 電気化学ナノバイオグループ 主任研究員 今村 岳 氏 嗅覚センサグループ 主任研究員 南 皓輔 氏 グループリーダー 吉川 元起 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『スピнкаロリトロニクスに関する基盤研究』 物質・材料研究機構 磁性・スピントロニクス材料研究センター スピンエネルギーグループ 上席グループリーダー 内田 健一 氏</p>

つくば賞

つくば奨励賞

<p>2024 (第35回)</p>	<p>『六方晶窒化ホウ素の高純度化技術開発と2次元量子材料応用』 物質・材料研究機構 理事 谷口 尚 氏 電子・光機能材料研究センター 特命研究員 渡邊 賢司 氏</p>	<p>2024 (第34回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『電子顕微鏡に技術革新をもたらす超高輝度ナノエミッターの実用化』 物質・材料研究機構 マテリアル基盤研究センター 先端解析分野 電子顕微鏡グループ 主任研究員 張 喆 氏</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『概日時計の破綻による概日リズム障害発症メカニズムの解明と、その治療法の開発に資する研究』 筑波大学 医学医療系 助教 平野 有沙 氏</p>
<p>2025 (第36回)</p>	<p>『全固体電池の研究開発』 物質・材料研究機構 フェロー 高田 和典 氏</p>	<p>2025 (第35回)</p>	<p>【実用化研究部門】 『持続可能な未来を支える革新的なマテリアル・イノベーション：TIISA断熱材技術の展開と社会実装』 物質・材料研究機構 構造材料研究センター 超耐熱材料グループ 主任研究員 Wu Rudder 氏 (ウー ラダー)</p> <hr/> <p>【若手研究者部門】 『水中における通信と測位を実現する音響無線技術に関する研究』 筑波大学 システム情報系 准教授/ 高等研究院 (TIAR)/自発研究ユニット フェロー 海老原 格 氏</p>

1 一般財団法人 茨城県科学技術振興財団の概要

- ①設 立 平成元年10月30日
- ②所 在 地 茨城県つくば市竹園二丁目20番3号（つくば国際会議場内）
- ③代 表 者 理事長 江崎玲於奈
- ④基本財産 3,540万円（うち県の出資3,470万円）
- ⑤設立経緯と事業内容

平成元年に茨城県における科学技術の振興に寄与することを目的に「つくば賞」の主催団体として設立された。

現在、「江崎玲於奈賞」「つくば賞」「つくば奨励賞」事業のほか、科学技術振興事業、つくば国際会議場管理運営等事業、つくばサイエンス・アカデミー事業を行っている。

2 つくばサイエンス・アカデミーの概要

- ①設 立 平成12年11月16日
- ②所 在 地 茨城県つくば市竹園二丁目20番3号（つくば国際会議場内）
- ③代 表 者 会長 江崎玲於奈
- ④会 員

個人会員を中心に組織される研究者の交流団体である。平成21年4月1日より茨城県科学技術振興財団と統合した。

*会員数：個人会員 278人 賛助会員 54企業・団体（令和7年12月1日現在）

⑤設立経緯

つくば国際会議場オープニング事業の一環として開催された、さまざまな研究分野の連携を目指した国際会議「サイエンス・フロンティアつくば（SFT）999」（平成11年11月17日～19日）の中で、その成果を発展させるため「つくばサイエンス・アカデミー（SAT）」を設立する旨の宣言が提案採択され、翌年設立された。

⑥事業目的

研究者相互の交流を促進することを通じて科学の振興に資するとともに、研究成果を産業や国民生活に反映することを目指す。

⑦事業内容（代表例）

- ・SATフォーラム等講演会の開催

これまでに小柴昌俊氏、野依良治氏、小林誠氏、根岸英一氏、中村修二氏、山中伸弥氏、大村智氏、大隅良典氏、梶田隆章氏、天野浩氏、吉野彰氏等による講演会を実施。

- ・テクノロジー・ショーケースの開催

研究者及び技術者が、最新の研究成果、アイデア等を相互に披露する異分野交流の場を提供することにより、科学技術の発展に寄与する。



一般財団法人 茨城県科学技術振興財団
The Science and Technology Promotion
Foundation of Ibaraki
〒305-0032 茨城県つくば市竹園2-20-3
つくば国際会議場内
TEL : 029-861-1205 FAX : 029-861-1209



つくばサイエンス・アカデミー
Science Academy of Tsukuba
〒305-0032 茨城県つくば市竹園2-20-3
つくば国際会議場内
TEL : 029-861-1206 FAX : 029-861-1209